

講演会 教育とニヒリズム(2)

講演者 センター客員教授 (コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ助教授) ルネ・ヴィンセント・アルシラ
東京大学大学院教育学研究科助教授 西平直

1999. 7. 21

この講演会は、センター客員教授、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ助教授のヴィンセント・アルシラさんに委嘱した研究「教育とニヒリズム」の発表を受けて、本研究科の助教授、西平直さんに同じ主題で報告をお願いし討論するかたちで展開された。あらゆる教育危機の深層にニヒリズムの問題がある。教育に浸透したシニシズムを克服するためにもニヒリズムに対する原理的、哲学的な考察が求められよう。アルシラさんと西平さんの報告と討論は、この大きな問いに接近する貴重な提言に溢れている。 — 佐藤学 (司会) —

西平：僕の試みは、前回 (p.6 ~ p.10参照) のアルシラさんのお話を受けて、実存的な学びという言葉はどう引き取るかということ。ニヒリズムの克服ということ。その中で、ライフナラティブということの一つのキーとしたいと思う。この言葉は訳すのが難しいが、「人生を語る」、「生活を語る」、「いのちが語る」、いずれにせよ実存的な学びの出発点としてのライフナラティブのことを考えたいと思う。

現代日本の精神風土の根っこのところにニヒリズムがある。一方にエゴイズムがあり、一方でシニシズム、真面目にやるのを冷ややかに笑うような風土があり、快樂主義、刹那主義とセットになったような形でニヒリズムというのがあると思う。

かなり無意識的なところでの投げやりの感じ、ないしは身体感覚としての諦め。そういう中で恐らく僕らは情報に麻痺することで、自己防衛的に対応している。慣れないと暮らしていけない。どっかで麻痺させているからそんなに危機的に感じなくてすんでいるのだろうと思う。「僕ら知っている、でもどうにもならないじゃないか。」特に子ども達で真面目に考える子どもほど、絶望的になる。「どうせ、どうにもならない。」無意識的なところで「大人はずるい、大人の付けを次の世代にまわしてるじゃないか、次の世代が背負っているじゃないか」とどっかで感じているのではないか。

「いかに儲けるか、いかに楽するか、結局みんな自分の

ことしか考えていない、どうせ変わらないならば、わがままと贅沢の限りを尽くして結局人間なんか滅びれば良いんだ、そうすれば地球が一番いいんだ。」そうしたある種の終末論的なイメージが根底に潜んでいる。

こうした中で、若い人達は自分の将来をどう考えるか、自分に希望が持てるか、というところが気になる。あるタイプの子供達と一緒にいて感じるのは、内側からわき起こる生きるエネルギーのなさである。確かに、僕らも上の世代からお前ら全然パワーがないと言われたが、我々のときとはちょっと違う感じがする。内側からのパワーがないが故に逆に外側の殻が厚い。だから空威張りみたいになってすごく攻撃的になったり、強がったりする。人といるともものすごく興奮してハイテンションになるが、一人になるとどっと落ち込んでしまう。見えているのは表面であるけれども、本当の問題は中。内側に流れるエネルギーみたいなのが、何かおかしい。

恐らくそれは食事の問題と重なるだろうと思う。拒食症の話だが、拒食症というと周囲は食べなくて可哀想と言うが、本人は快感である。エネルギーの無くなっていくときの心地よさなのである。それはある種の無痛・無感覚の文化、麻痺させることによって、社会に何とか適応していく。それも広い意味でのニヒリズムとして捉えたいのである。

その象徴として、なぜ死んではいけないのか、という問いがでてくる。なぜ死んではいけないのか、自分の身体じゃないか。その問いに対して、僕らの世代はどう答えることができるのか。自信が持てなくてそれに良く応えられない状況になっているのではないか。ある意味で投げやりの状況に対して、どこで踏みとどまることができるのか。それに適切には答えられないのだが、そのまま崩し的に後ろに下がりにたくない、どっかで踏みとどまるとしたら、どこか。僕は〈自分の人生を語る〉というところで踏みとどまりたい。

さしあたりは、前の世代が後の世代に自分の体験を語ることを、自分史を語るでも良い。自分が大切にしてきたもの、自分の悲しみだとか、自分の後悔だとか、それを

語る。それで良いのだと思う。もはや倫理の問題ではなく、自分が若いとき何をかっこいいと思って生きていたかを伝える義務、責任。人生ということ語るということはおそらく日常の生活とはレベルが異なる、メタレベルの時だと思う。その意味で、人生について語りうる機会をどうやって作り出すかが責任として問われるだろう。それは同時に若い世代が、自分は何をかっこいいと思って生きているのかを語る機会を作ることだと思う。一緒に稲刈りをやった後、あぜに座って一服するというのが僕のイメージだが、恐らく一緒に何かをする、例えば旅に出る、その中でそういう場が恵みのように生まれてくる。意図的に、じゃあ今から人生について語りましょうと言うと駄目だと思う。でも、そのチャンスがおとずれる場を設定する義務はある。それをせめてもの踏みとどまりとしたいと思う。

日本の伝統に「生活綴方」ということがあったが、あの「生活」をライフという言葉にすれば、「人生」を語ることに同じになる。しかし、生活綴方の時には自分の社会的な貧困の問題とか、かなり社会科学に通じる自覚が期待されていたと思う。それに比べたらもっと実存的、内面的であるし、心理的な意味で「人生綴方」になってもしょうがない。ただ、日本の言葉の人生という言葉は、どうしてもべっとりしたイメージがあるので使いにくい。それで僕は、「ライフナラティブ」という言葉を使ってみたい。

ライフという言葉は、英語では3つの意味をあわせ持つが、日本語だとはっきり分かれる。生活、人生、生命。ライフナラティブという言葉に込めたいのは、今言ったように生活を語るであり、人生を語るだが、生命という言葉にもこだわりたい。それは、私が生命を持っているというレベルを突き抜けてしまう。生きとし生けるもの全てが生命を持っている、その同じ生命を僕も分け持っている。ないしは地球の46億年の歴史の中で生命が続いてきて、たまたま今こういう形で生命を預かっている。そうした、開かれた生命、個人に限定されない生命という、そのニュアンスまでこの言葉に含めたならば、もはや私が生命について語るのではなくて、生命が私を通して語り出す、という、恐らく僕は最終的にはそれを願っているのだと思う。

「語り部」という言葉が持っていた日本の語りという言葉には、このニュアンス、つまり、私が語るのではなくて何者かが私を通して語る、という意味があった。井戸端で語り部が語る。もはや語る主語は私ではない、何ものかが私の口を通して語る。そんな意味で、ライフナラティブという言葉は、アルシラさんがおっしゃった実存

的な学びという、学びの出発点に置きたいと思っている。

アルシラ：今日の講演のタイトルは実存的な学びということで、まず最初に前回行った話のポイントを3つかいつまんで話す。まず前回の話の第1点、現代の文化を覆っている主体的な問題としてのニヒリズムということ話を話した。現在の文化が娯楽文化というものに最高の価値を置くものとなっているゆえに、その中で現実世界の応答性と責任ある行為を取ることが出来なくなっているという問題がある。第2点は、こうしたニヒリズムの特徴として、私は今日の文化が感性主義的なりベラルアーツの学習を支援できなくなっている。リベラルアーツの学習というものを近代主義の反体制文化、すなわち、アバンギャルドアートの中に根付かせることによって文化というものを再活性化させることを定義した。

本日の中心課題に移りたいと思う。今日の問いでは2つの問いを投げかけたいと思う。もう少し前回の問いを具体的に、我々の文化を覆っているニヒリズムというものが今日の若者の生活にどういう影響を及ぼしているか。第2点は、教育者はいかにして若者がニヒリズムに対応する上での支援を与えているか。

一つ注意申し上げたいが、今日お話しする私の考えの大半は試作の過程にあり、西欧文化の理解に基づく私の知識なので、皆さんから建設的なご意見を伺いたいし、日本社会の中でどのように関連づけられるかをお話したい。

今日はニヒリズムと若者の問題について話す。モリエールの有名な演劇である「人間嫌い」に引きつけて話す。アメリカのスタンリー・カベルという哲学者が解釈しているが、私自身が人間嫌いというものを、ニヒリズムの文化に今日の若者が人生に応答している形として人間嫌いという形で中心化してみたいと思う。こうしたニヒリズムへの若者の対応を書いているものとして、サリンジャーの「ライ麦畑で捕まえて」やジェームス・ディーンが主演した「理由なき反抗」が他にある。この登場人物であるアルセストは、一言でいうと、大人社会の持つ不誠実さにうんざりしていて、その世界に参加すること、そして支援し、援助することを全く拒絶している。大人の社会の持つ不誠実さはどういうことかという、大人の社会は偽善的で嘘に塗り固められている。本当に感じていることを表現しようとしなないイメージである。好意的に見せかけていても本当に相手のことを気遣っているわけではない。人生とか生活というものを明るくて可愛くてハッピーだと表出しているが、実はそれは本当の私たちの生活を表しているのではない。偽善的な大人社会を拒絶している。こうした大人社会を拒絶するアルセス

トへの対応の可能性として、どうして関係のないことを話すことが大人社会の中で重要なのか、それは対立をなくすためであるなどの理由づけを与えることが大切であるが、アルセスト自身はこうした理由付けを理にかなったものではないととらえてしまう。若者はこうしたかたちで大人からの理由付けに耳を貸さないが、そうしたなかで誠実に生きるという自分自身の自信をも喪失させる。周りの人誰もが出来ないのだから自分をも出来ないという、自身が当惑した感覚で表される。自分が一体誰かということがわからなくなってしまふ。結局こうした絶対的なこの今日の若者が抱える問題とは、若者は不信感にして自己内分裂に陥っている。大人社会がもっと誠実になれという要求を出せば出すほど、それが実現不可能なものであるということを確認ざるを得ない。絶対的な誠実さの要求が絶望に転換されるメカニズムを造り上げているのである。こうした問題の中にあると、若者自身が自分たち自身の声を発見していくことを脅かされる。教育者に課される課題は、こうした問題に建設的に関わる問題である。

ここからが私の実存的学習の提言であるが、教育者はアルセストに代表されるような若者達に対して、大人社会に参加しなければいけませんよという言い方をしたり、大人社会に入っていくのに妥協せよという要求を突きつけずに、アルセストの抱えているような拒絶の感覚を認めつつも大人社会の中で誠実に生きていくことが可能であるということを示すことである。これを達成していくうえで、私のいうところの実存的な学び、文化の中のある一つの形態が学びを可能にしてくれる。これをどうやって実現していくか。私は大人の世界が不誠実であるというアルセストの述べている訴えを、まず大人が真実であると認めることを提言する。アルセストの声に誠実に共感しようとする試みなのであるが、その為にはあるアルセストの主張の真実さを認めるだけではなく、彼の言っている批判をもっと深めていくことである。私のアプローチというものは、人間存在のもつ人間性というものに目を向けるということである。人間というものが全て死すべき運命を背負っているという観点からすると、世界が安定したもので、確実である、というのが実は全て見せかけのものである、そして人間はこの世界に置いて異邦人であるということが明らかになってくる。ゆえに今私たちが生きている世界というのは安住の住処ではあり得ないという予測がたつ。こうした問いかけをするときに強調していくべき点は、答えを見つけていくのではなく問いかけをしていく、ということが中心的な課題になってくる。世界存在と人間の存在は実は根拠のない

不確かなものであるという真実を否定してしまうことが、不誠実さの根源にあると考えている。逆にこの存在の持つ不確かさを出発点として認めることが誠実さの一つの条件ということ、こうしたことをみつめて問いを発し続けていくことが哲学の中心的役割であると思う。哲学の語源は、問いを愛するというこゝで、また同時に世界の持っている真実性に敬意を払っていくということに繋がってくるのではないかと思う。ところが生の持つ不誠実さを認めるというところで話を終わりにしてしまうと、私たちはアルセストに対して生は根元的に不確かで、無根拠なものであるということに踏みとどまってしまつて、非常に破壊的なニヒリズムをもたらしてしまう。つまり、生は根拠がなく、不確かなものなのだから信じるに値しない、人生は生きるに値しない、そういう結論を若者が引き出す可能性もある。そこで私は2つ目の提言をしたい。誠実さの持つもう一つの要素に目を向けよ、ということである。私たちの生から自然にこみ上げてくるものに感謝する、という要素である。こうした自発的感情は我々を生きているという喜びにつないでくれる。私たちが生きている生というものが、結局底がない、大変不確かなものなのであるが、そうした事実によって存在そのものの中から存在不可思議性、驚きが生まれてくる。こうしたアプローチを取ることによって、自らの持つ自発的な感覚への感謝の念を育てていくことを手助けしたい。自ら持っている五感、見たり聞いたり触れてみたりという感覚への純然な応答に目覚める助けを産む。

ここまで述べてきた中で、私の提言する学びというものになぜ実存的学びであるかいうと、1つは、人間というものはいつか死すべき運命を背負っている、ということを確認することが誠実さを構成することになる。もう1つの側面は、同時に生の有限さというものだけではなく、存在の持つ不可思議さに目を向けるというものである。存在というものが、不確かで不安定な、はかない存在ということを確認することは、生の驚き、不可思議さに感謝の念を抱かせる。こうした実存的学習の考えに立つてする教育的アプローチというものは、更に2つの要素を持っている。一方では哲学的な問いかけを主張し、もう一方では私のコロンビア大学のティーチャーズ・カレッジの同僚であるマキシム・グリーンという哲学者が主張するところの、純然たる生の科学というものを強調していくということである。前回述べたように、哲学的問いかけと覚醒感覚を育むということは、私が前回述べた近代のアバンギャルドな文化の特徴であり、私が今日提唱する実存的学習に非常に有効なものではないかと思う。

最後に2つの点を述べたい。私の述べる実存的学習という考えが、学習そのものを手段として捉えられるような道具主義的な考えに代わるもの、それが私の提言する実存的学習である。学びのプロセスというものが学びの目的から切り離されるようなサブ習慣である。私はこういう道具主義的学習観を全面的に批判するわけではないが、実存主義的学習というものが、学びというものは別の見方を示唆するものであるということで、人間が人間として存在していくということ自身が学習することである、つまり、我々は学ぶ生を生きる、学ぶ存在であるということ定義する。

実存的学習の観点に立つと、政治的なコミュニケーションとしては、教育を教育の外にある社会問題の批判に使おうとする試みではなくて、むしろその社会というものが学習する存在としての我々の生をよりよく支援するように、世界を改良しようとする試みである。これは文化そのものを娯楽文化に基づくものから、我々が学ぶ

存在として純然な生を生きるような学びの形態へと文化を変容させていくアプローチである。実存的学習は人間の価値とか学習の意味のもうひとつの見方を提言するものである。ニヒリズムの中に生きる若者に対する教育の中心となるばかりではなく、教師教育の中心ともなるべきものであると思う。実存的学習というものに経験し反芻することが、教師自身が理想とする純然たる人間の生の生き方に献身していく、コミットしていく表現として考えるきっかけになることがある。つまり、教師というものが純然に学ぶ存在として生きるということはどういうことなのか、という考えに対して自らを方向付けていくような学びの形態、つまり学ぶということが純然たる人間であるということの一部を構成する、そういう考え方にたつものとしてくる。こうした倫理的感覚を教師自身が持つことによって教師の仕事が実りあるものとなって、生徒に対しても効果的なものになるのである。